

心理学知識の実生活への提言（その1）

最近「サイコロジー（心理学）」に興味を持ち、さる大学の教科書を読破してみた。その結果、今までの「勤務参考」の随所でそれを引用してみたが、最終的にはこれを実生活で有効に駆使するのは・・・という課題が残り悶々と読み続けると、その教科書は最終章で「心理学知識の実生活への提言」という形で締め括られていた。実に心理学者は長けていると感心すると同時に、「勤務参考」として紹介すべきであると考え、ここに要約を引用することとする。

【心理学の知識から実生活への提言；目次体系】

- 1 具体物への興味・関心について
 - 具体的成果の達成
 - 曖昧さに対するトレランス
 - 無邪気な好奇心
- 2 現実に強くなるということについて
 - 行動力
 - 権威的思考の脱却
- 3 社会的存在になることについて
 - 狭い領域への固執の除去
 - 集団・組織への影響力
 - 幅広い人間関係
- 4 人としての資質について
 - 地道な努力の継続
 - 世俗的欲求からの脱却
 - 見当識の保持

このような目次に沿って取り上げているが、この中には相互に矛盾するような項目も含まれている。しかし、例によって分類することの困難性からくるもので、以後の解説でその辺は解消されると考える。（以後数回に分けて連載する。）

【1 具体物への興味・関心について】

1. 1 具体的成果の達成

まず、具体的成果の達成について考えてみる。

現実社会の中で仕事をする限り、具体性のある結果を提示し、それが現実的な効果を発揮しないことには、なかなか個人の存在は認められない。卑近な例では、現実世界では仕事が金銭で換算される場合すらある。金銭で仕事の評価を決めるというのはいかにも卑しいことのようにも聞こえるが、どうして、長い目で見れば、世の中の金銭の理論も一面

ではそれなりの合理性をもっているものだ。しかし、そうはいつでも、金儲けを志せ、と言っているのではない。置かれた立場で、精一杯仕事をする、時にそれを金銭に置き換えても評価できるような仕事をして欲しいと語っているのである。理屈はこねるが、いざ実行の段階になるとなにも出来ないという人々を間々見受ける。これは心理学的性格の分類に依れば、外向性傾向の強い人に良く見られる行動である。もし自分がそのようなタイプの人間であると認識しているのならば、ぜひとも内向性傾向の人の行動から何事か学び取ってみるべきであろう。

1. 2 曖昧さに対するトレランス

曖昧さに対するトレランスとは難しい言葉だが、要は心理学のテクニカルタームである。トレランスとは耐性と訳され、何事かに耐える力、忍耐という言葉に一番近いだろう。前項とも関連するが、現実の世の中というのは、極論すれば妥協の連続の社会である。例を引くと、工業デザイナーがものを作る場合でも必ず何らかの妥協の産物としてそれらは作られるのが常である。コンピュータ機器、航空機、自動車、船舶、各種建築物等々、世の中に出回っている物すべてデザイナーの「このように作りたい」という当初の願望と、現実社会からの要請（時間、空間、金銭、人心等）との妥協で作られているものばかりである。学校で学んだ純粋科学のように、世の中の事象の一部を切り取って（ある範囲で系を確定して）、限られた方法を駆使し、条件内だけで成立する減少を追及するという社会とは根本から異なっている。だから、実社会では、割り切れない、すっきりしない、という心の葛藤を味わうことがしばしばである。このような状況をそれはそれとして受け入れられる、現実的要請の意味をそれなりに理解できるということが必要となってくる。そのためには、後述するが、幅広い知識や健全な常識といったものが求められることになる。

このような曖昧な場面に対して耐える力、そのような心の強度のことを、心理学では「曖昧さに対するトレランス」と呼んでいるのである。そしてこの曖昧さに対するトレランスという概念を心理学では一つの尺度として構成し、これを「個人のマチュレーション（成熟）」の度合いを示すものだと解釈しているのである。

(つづく)

次号； 1. 3 無邪気な好奇心

【2 現実に強くなるということについて】

2. 1 実行力

2. 2 権威的思考の脱却

